

第1章 豊前市の景観特性と課題

1. 豊前市の景観の成り立ちからみた特性

(1) 山から海へつながる地形がかたちづくる原風景

市域の南西部には、標高 1,000m前後の犬ヶ岳・経読岳などの山々がそびえ、雁股山、大平山など東へ続く山並みは平野部から遠望でき、豊前市の原風景となっています。

山々から伸びる富士山に似たゆるやかな火山麓の尾根が平野や豊前海へと迫り、山から海へと連続的な地形を形成しており、尾根筋のなだらかな稜線は穏やかな表情を見せています。国見山や尾根の端部にある天地山公園などからは、遮るものがなく平野や豊前海が見渡せます。また、尾根筋が海に迫る松江の紅葉ヶ丘は、市街地を見渡せる場所となるとともに、身近な緑地となっています。

奥深い山々を源流とする岩岳川、中川などの河川は、山あいをぬって豊前海へと流れていきます。そして、これらの山々の重なりと清流と言われる川によってつくられた谷筋は、山に挟まれ細長くつながる静寂な空間をつくりだし、それぞれの谷筋ごとに独特の景観を形成しています。

市域北部の平野は、西部は海成段丘、東部は佐井川、岩岳川によりつくられた扇状地となっており、吉富町、上毛町から中津市にまたがる山国川流域の中津平野と一体となった広がりのある景観を形成しています。尾根筋が迫る西部の段丘ではやや起伏のある地形となっており、扇状地は広がりのある農業地帯・市街地となっています。

平野の前面には、干潮時には最大1キロも潮が引く遠浅の豊前海が広がっています。この豊前海には大小の河川が山からの豊かな恵みを運び、漁業をはじめとする人々のいとなみを支えています。また、穏やかな豊前海の水面は、朝夕の陽の光によって多様な表情を見せ、訪れた人々の心に残る美しい景観となっています。

豊前市には、このように山岳地、谷筋、平野、海辺と変化に富んだ大地形の景観が、人々の暮らしと深く関わり合いながら、太古から変わらない原風景として引き継がれており、豊前市の歴史や産業、文化などの個性を育む基盤となっています。



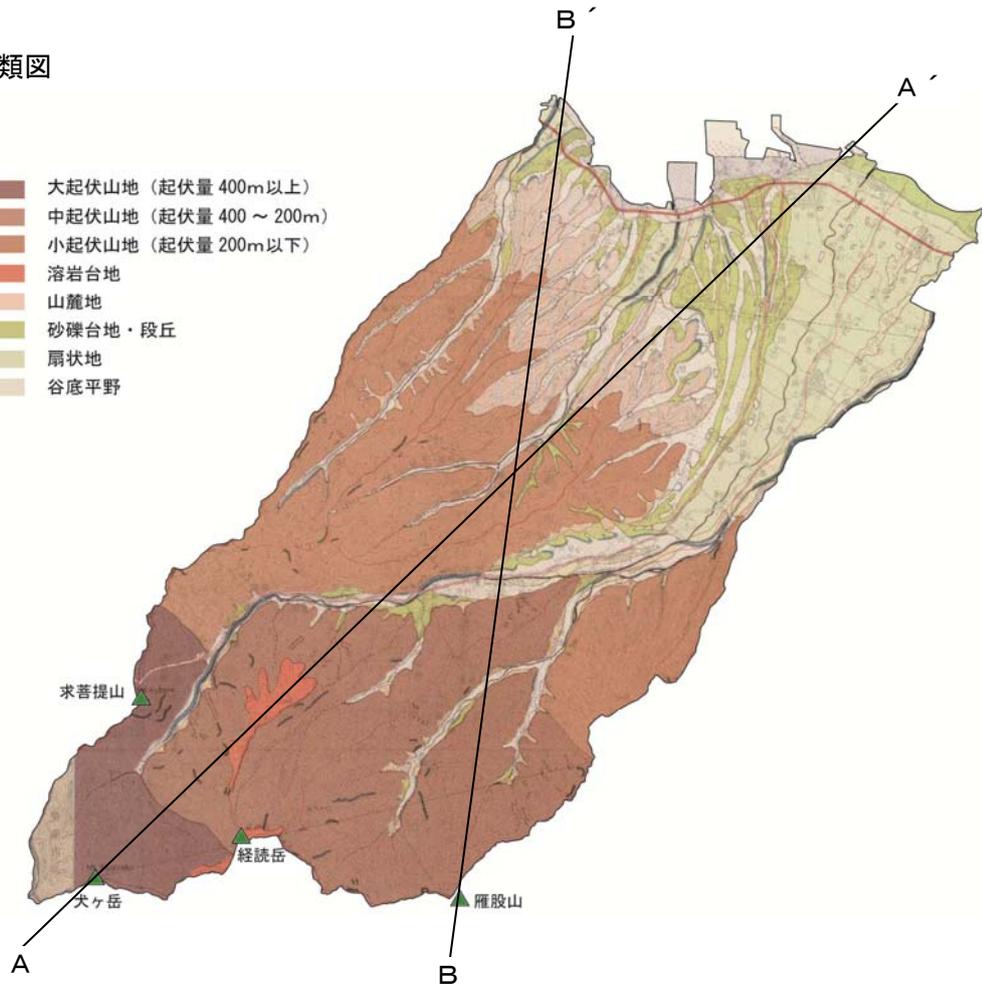
■天地山公園



■豊前海の日の出

■ 地形分類図

- 大起伏山地 (起伏量 400m以上)
- 中起伏山地 (起伏量 400 ~ 200m)
- 小起伏山地 (起伏量 200m以下)
- 溶岩台地
- 山麓地
- 砂礫台地・段丘
- 扇状地
- 谷底平野



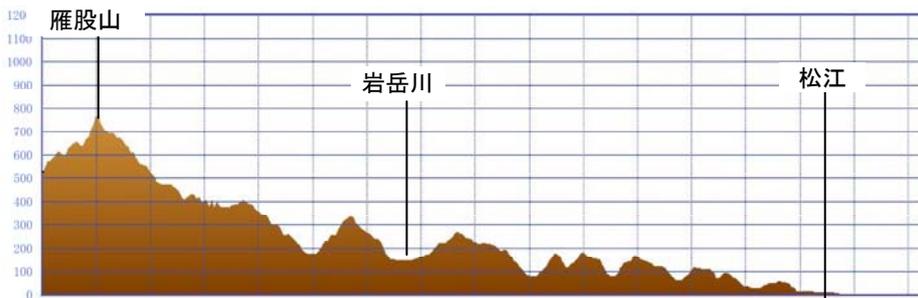
資料：5万分の1 都道府県土地分類基本調査

■ 地形断面図

● 犬ヶ岳から宇島 (A~A')



● 雁股山から松江 (B~B')



資料：カシミール 3Dで作成

(2) 多様な生物を育む自然景観

標高 1,000mを超える低温帯に位置している山岳地から遠浅の豊前海に至る大地形で構成される豊かな自然環境は、多様な生態系を育む場となっています。

山岳地では犬ヶ岳のブナ林やツクシシャクナゲ、ヒメシャガ等の学術上価値の高い植生が見られ、丘陵部の山地には針葉樹のスギ・ヒノキの植林地や乾燥に強い二次林のアカマツ群落が広がっています。河川には清浄な環境を好むヤマメ、ゲンジボタル、カジカガエルや、ヤマセミ、カワガラス等の鳥類も見ることができます。

また、豊前海の干潟は、多くの魚貝類や小動物が生息し、絶滅が危惧されるカブトガニやアオギス等の生きものの貴重な生息地となっており、その他、ガンやカモ類などの渡り鳥やシギ、チドリなどの野鳥が飛来する風景を目にすることができます。



■ ツクシシャクナゲ



■ 犬ヶ岳のブナ林



■ 才尾の一本桜



■ 枝川内アジサイランド



■ ヒメシャガ



■ 河津桜

(3) 自然と調和したなりわいの景観

豊かな自然条件を生かして農林業や漁業が営まれており、広がりのある水田や多様な作物が栽培された畑などの農地の景観、海辺で行われる漁業の景観などがみられています。このような景観は、人々の営みからつくり出される「なりわい（生業）の景観」ということができます。また、農林業や漁業は、農地や海に近接した場所に人々が集まり住み、営んできたものであり、農・漁村集落は、そのような人々の暮らしの場として、なりわいの景観と一体となった景観を形成しています。

温暖で少雨の瀬戸内海型気候と火山岩質の乾燥した土地が多い条件にある豊前市では、水資源の限られた環境となっているため、多くのため池を設けるなどにより農業用水を確保しながら農業を営んできました。平野部の田園地帯では稲作・畑作・果樹など多様な農業が行われています。農家は微高地や道沿いに集まって集落をつくり、集落は平野の中に島状に点在して広がっています。周りを農地に囲まれた中に、家並みや屋敷の樹木が集まって見える風景は、豊前市の田園のなりわい景観となっています。

谷筋が開けたところでは、なだらかな尾根筋の斜面樹林地を背景にして水田が広がっており、集落は山すそに寄り添うようにたたずんでいます。奥深い谷筋の斜面地には、美しい石垣が積まれた棚田がつくられ、稲作や果樹栽培が行われています。岩岳川沿いでは、中世の山伏達によって伝えられたお茶が今日も引き継がれています。また、山間部では、京築ブランドとして期待される京築ヒノキを産出する植林地があります。

こうした山並みや谷筋などの自然の地形を活かして営まれてきた農林業とこれを支える農業集落の姿は、豊前市の山のなりわい景観となっています。

山の豊かな恵みは、山のみならず、清流を通して海にも幸をもたらします。豊前海沿岸一帯では、遠浅の海を利用して“海のミルク”と称される豊前海一粒カキや豊前本ガニ、車えびなどの養殖や沿岸漁業が営まれています。この他、八屋の海辺では潮干狩り、河口域では釣りを楽しむ人々の姿が見られます。こうした豊前海に浮かぶ養殖筏や漁船などの姿は、豊前市の海のなりわいの景観となっています。

なりわいの景観は、自然だけでなく、人々の様々な営み・暮らしの場として歴史や文化とも深く関わっており、豊前市の重要な景観となっています。



■ 谷筋の棚田



■ 豊前海一粒カキ

(4) 往來の文化と修験道文化を今に伝える豊前市の歴史景観

豊前市が位置する京築地域は、豊の国といわれた古代から九州地方と中国・四国地方、近畿地方を結ぶ交通の要衝となっていました。8世紀前半には、宇佐神宮が建立され、各地に八幡信仰の文化が根付いていきました。この時期、太宰府と宇佐神宮を結ぶ大宰官道、都から宇佐神宮へ下向する勅使街道(上往還)が設けられ、大和朝廷と宇佐神宮を結ぶ重要な役割を果たしました。こうした畿内や太宰府との関りの中で豊前市内には、おこしかけなどの伝説や大富神社、角田八幡神社、白山神社などの宇佐神宮と関わりの深い神社が造営されました。神社の境内の樹林は、当時荘園として開発された周辺の農地と一体となって、現在の集落景観をつくりだしています。

12世紀頃、平安時代末期に確立された山岳宗教である修験道は、求菩提山、英彦山など、北部九州修験道の一大道場として隆盛を極めました。火山岩地質の侵食や風化によって形成される地形が信仰の対象として仰がれ、構の石門、みそぎ場、鬼の石段、岩洞窟など数多くの修験道遺跡が残り、その文化を伝える景観となっています。求菩提山の修験道遺跡は国の史跡に指定されています。また、周辺の農地・集落と一体となって、「豊州求菩提山絵図」に描かれた歴史的文化的景観を今に残しています。

江戸時代に入ると、小倉と薩摩を結ぶ海際の道として中津街道(下往還)が整備され、街道沿いには八屋宿、松江宿などが形成されました。街道の道筋は往時のまま残されており、街道沿いに建物が建ち並ぶ街並みの雰囲気は今も感じることができます。その他、郡界、藩界の傍示石や道標などの歴史遺産が残されています。



■ 求菩提山上宮



■ 大富神社



■ 宇島の街並み



■ 沓川の街並み

(5) なりわいととともに伝わる祭礼景観

豊かな自然環境が育んできた農林水産業のなりわいと八幡信仰や修験道の文化を背景に、これらが密接に結びついた独特の祭礼文化が伝わっています。

降雨の少ない風土を特徴としている豊前市では、天災や水不足の際に、五穀豊穡や雨乞いなどを祈願する大富神社、宇島神社の神幸祭や八屋祇園、宇島祇園、山田の感応楽、角田の豊前楽などの祭礼行事がさかんに行われてきました。また、雨乞いのために山中の滝へ水源詣や神社でのおこもりも行われていました。五穀豊穡と国家太平を祈る予祝行事として行われていた「求菩提山のお田植祭り」や無病息災を祈る「畑のどんど焼き」などの農村行事は今も伝えられています。

古くから豊前八郡に伝わる神楽は、江戸時代には「社家神楽」として舞い継がれ、今日の神楽講の成立につながりました、近年では市内のほとんどの神社で、神楽が奉納されています。

また、地域づくりグループなどによるシャクナゲ祭り、合河ユズ祭り、宇島お魚祭り等の民間主導のイベントも、市内外から支援され盛り上がりを見せています。

こうした活動の景観は、地域住民、まちづくり団体・NPO、行政等の様々な主体の活動の連携によって伝えられ、また地域の内外に情報発信していくことで、より魅力的なものとなる景観です。



■黒土神楽



■神楽の舞台となる嘯吹八幡神社

(6) 港とみちがつくった近代の街並み景観

江戸時代末期に、宇島港築港の大事業が行われ、七年の歳月と莫大な労力と費用を投じて豊前東部第一の良港が完成し、海上交通が整備されました。築港完成とともに町筋の街路の整備と中津往還の修復も行われ、この頃から宇島は廻船問屋などが建つ町として発展しました。

近代に入ると、豊州鉄道（後に九州鉄道日豊線、現在のJR九州日豊本線）や国道（八屋～吉富）が敷設され、現在の豊前市の発展の礎となりました。日豊線は、筑豊炭田の隆盛とともに石炭を運ぶ輸送路となり、宇島港は、関西方面へ石炭などの物資を積み出すと港として発展し、近代産業を支える基盤となりました。こうした物資の積み出しで栄えた豊前市の沿岸地帯には、大正年間に鉄板製造や製糸業の工場が立地し、昭和の初めに火力発電所が設けられるなど工業都市が形成されました。

石炭の積み出しがなくなった後も、港湾の整備や海面埋立が行われ、工場地帯として産業が発展し、これに伴い、その周辺には住宅地や商業施設等が建設され、市街地を形成してきました。

宇島港や埋立地などは、地域の繁栄を伝える近代産業景観であるとともに、地域経済の将来を担う基幹産業でもあり、地域における産業のなりわい景観となっていますが、発展の半面、自然の海岸線が失われるなど、それまで引き継がれてきた景観を改変してきたことも否めません。

昭和50年代から国道10号豊前バイパスが建設され、平成に入って完成し、その後平成5年に椎田道路が開通したこともあり、国道10号沿いへの工場や商業施設の立地が進んでいます。



■宇島港



■県道中津豊前線の街並み

2. 景観形成の課題

(1) 景観特性からの課題

① 良好な自然景観の保全・継承

豊前市の原風景となっている大地形がつくる景観や自然景観は、将来にわたって保全・継承していく必要があります。しかし、田園や海辺から見る遠くの山並みへの眺望や山から海を見下ろす眺望などは、樹林地の開発や大規模な建築物が眺望を遮ることなどにより、損なわれてしまうことが危惧されます。

良好な眺望景観を守っていくためには、土地利用規制や環境保全施策などにより豊かな自然環境を無秩序な開発から守るとともに、建築物や工作物などが周辺の自然と調和するよう誘導していくことが必要となります。

また、その場合、地形がつくる空間の広がりや土地利用の種類などによる景観の見え方の違い、地域になじんできた伝統的な建築物の様式などを踏まえ、地域別の景観のあるべき姿を考え、その方向に沿うよう土地利用や建築物等の形態・意匠の誘導をきめ細かく行っていく必要があります。



■丘陵地から市街地を臨む眺望景観



■轟地区の棚田



■田園の中に見える工場



■自然と調和した建物

②なりわい・暮らしと密接した農村・田園景観の保全・継承

農業などの人々の営みによってかたちづくられてきたなりわいの景観は、時間の流れと社会環境の変化により、大きく変貌しています。とくに、耕作放棄地の増加は、農地の持つ美しさを阻害し、田園景観の喪失を招いています。このように、山や谷筋などの自然景観や地域のなりわいを支えてきた田園景観は、高齢化や過疎化の進展などに伴い、保全・継承していくことが困難になってきています。

また、農地が広がる中でのミニ開発や資材置き場等が点在することなどにより、田園景観の連続性を阻害している場所もあります。

このままでは、先人達が作り上げてきた豊前市の魅力あるなりわいの景観がますます失われてしまうこととなります。

現在の良好な農村・田園景観を守っていくためには、農地を保全し、有効活用を促進するとともに、その景観を生み出し、支えている農業自体を維持し、振興していく必要があります。このため、農業の担い手確保や農地の保全・整備などの農林業施策と連携した景観形成を展開していく必要があります。



■広がりのある農地



■茶畑



■耕作放棄地



■田園の中のミニ開発

③歴史的・文化的景観の保全・継承

古代から人・モノが往来した歴史や修験道が盛んであった歴史を持つ豊前市には、地域の歴史を今に伝える遺構や建築物等が残っています。また、農業を主として営んできたこの地域では五穀豊穡等を祈る神楽などの祭礼行事が盛んに行われてきました。これらは、豊前市の個性として守り、将来へ引き継いでいくとともに、観光資源などとして活用していく必要があります。

しかしながら、高齢化や後継者不足により、地域が守り育ててきた歴史的な景観や豊かな自然とともに語り継がれてきた神楽等の文化的な景観を守り、引き継いでいく地域のしくみが弱体化することが危惧されています。

そうした地域の歴史的・文化的な景観を守り、後世へ伝えていくためには、農林業施策や文化財保存などの施策と連携し、歴史資源を取り囲む農地や集落を含む地域一帯の景観保全の計画をつくり、保全・整備を行うとともに、多様な主体による景観保全や祭礼を伝承していく取組みを活性化していくことが必要となります。

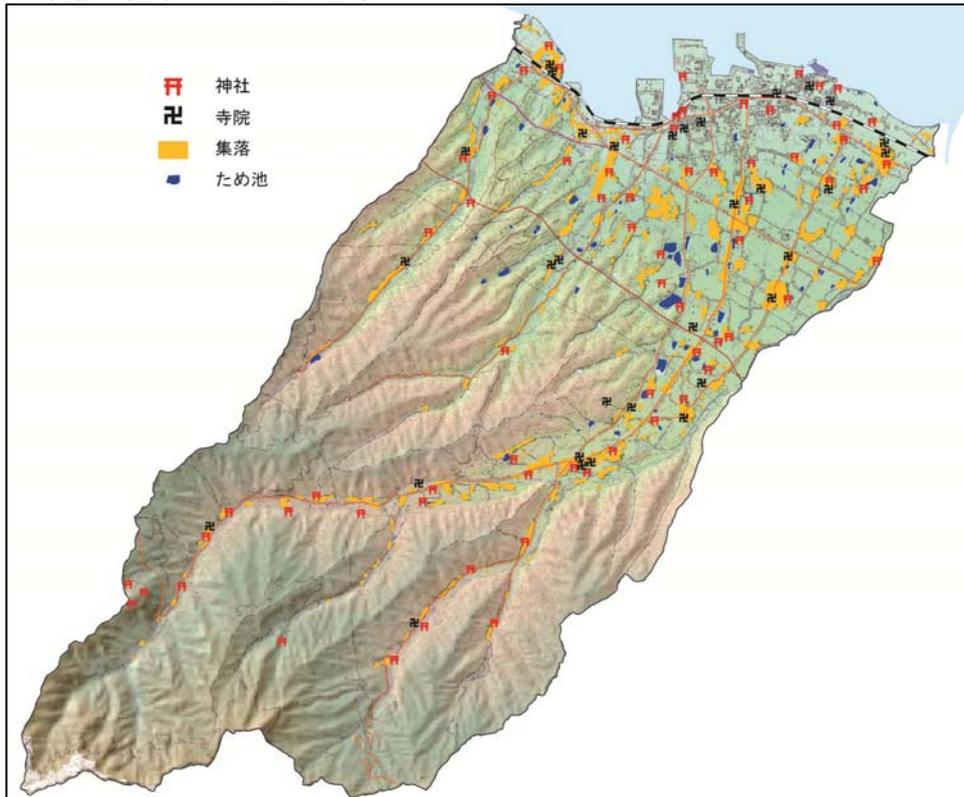


■畑冷泉・水神社



■伝統的建築物

■集落・社寺・ため池の分布



④近代都市景観の位置づけ

江戸時代末期から戦後の高度成長期まで、豊前市は交通路の発達と臨海部の工業開発により発展を遂げ、近代的な都市景観が創出されてきました。幹線道路や港、発電所や工場群などの景観は、都市としての豊前市の特徴を表わしているといえます。それと同時に、旧街道の街並みやまちなかの神社などが残されており、共存し、調和が図られてきました。

しかし、経済性を優先した市街化の進展や開発行為によって、豊かな自然と人々の営みなどによって形づくられた良好な景観が失われてきたことも否めません。

このような豊前市が歩み、形づくってきた都市の姿を適切に評価し、今後の景観づくりの中に位置づけ、保全し残すべきもの、改善すべきものなどを明確にし、将来に向けどのように調和を図っていくかを考え、個性ある豊前市をつくっていく必要があります。



■ランドマークとなっている火力発電所



■旧街道の街並み



■昭和10年頃の工場地帯 (市制50周年記念写真集より)

(2) 景観の現況と将来展望からの課題

①市街地景観の適切な誘導

周辺の自然や田園の景観にそぐわない建築物や工作物、屋外広告物がつくられることにより、これまで営みとともに形づくられてきた景観が損なわれてきています。とくに、大規模なものや色彩が派手な商業施設や遊戯施設の立地、屋外広告物の乱立などは、道路からの眺望を阻害するとともに、周辺の景観と調和しない街並みとなるなど、景観に大きな影響を及ぼしています。

このような周辺と調和しない開発や建築などの行為を、未然に把握し、土地利用特性と土地利用計画を踏まえ、建築物の誘導や屋外広告物の規制など、適切に誘導していくことが必要です。

また、誘導を行うにあたっては、地域や場所ごとに目指す景観の姿を指し示す方針や、どのようなものまでが許容されるかなどの基準を定める必要があります。



■国道 10 号



■県道中津豊前線

②将来の美しい都市景観の創出

豊前市では、都市計画道路の整備や土地区画整理事業の実施などにより、新しい都市づくりを進めています。このような事業が行われた地区や新しく整備された住宅地は、新しい豊前市の都市景観を作り出しています。

これからも、良好な都市景観を創造し、人が住みたくなるような魅力を盛り上げていくために、質の高い公共空間整備と民間の土地利用、建築物などの誘導を推進していく必要があります。

とくに、市街地の範囲の明確化によりコンパクトシティの形成を図るとともに、市の玄関口である宇島駅前や新産業ゾーン、文化ゾーンなどにおいて、豊前らしさをアピールできる新しい空間づくりを行うことなどが重要となります。

このため、土地利用のコントロールを計画的に行うとともに、緑化を促進するなど潤いのある景観形成が望まれます。



■整備済み都市計画道路



■赤熊土地区画整理地区

③今後の開発動向への対応

豊前市内の国道 10 号は 4 車線化が進んでいますが、周辺では道路拡幅が進められています。交通の利便が良くなり、沿道に商業施設などが一層立地することが考えられるため、国道 10 号沿線の幹線道路にふさわしい新しい良好な街並み形成を誘導していく必要があります。この場合、周囲の田園との調和や遠くに望む山並みへの眺望の確保などについて検討する必要があります。

また、今後東九州自動車道の建設が進められ、山麓部での景観が変化することが懸念されます。とくに、インターチェンジ周辺など利便性が良くなるところでは、大型商業施設や娯楽施設などが進出し周辺の景観を壊すことが懸念されます。このようなことを防止するため、平成 19 年に準都市計画区域が設定され、一定の開発行為が規制されるようになりましたが、景観面でも良好な景観を守りつつ、新しい都市の姿をつくっていく方向性を検討しておく必要があります。

④観光振興など地域の活性化に資する景観形成

市内の観光資源周辺など、景観づくりを通じた地域の活性化が期待されています。

温泉・冷泉施設や公園など既存の資源を生かしてその周辺の景観を改善していくとともに、観光スポットへの案内の充実や農家民泊など観光を通じた住民交流の促進など観光と景観施策が連携した取組みを推進していく必要があります。

例えば、岩岳川沿いなどにモミジやカエデなどを植え紅葉の名所にする、花の名所周辺や歴史・文化資源をめぐる美しい散策路を設けるなど、景観づくりの面から地域の魅力を高め、活性化を促進していくことが重要です。

(3) 求菩提地区の景観形成の課題

求菩提地区については、歴史ある地区として、固有の課題があります。

地区の歴史景観と農村景観をもとに概ね3点に整理ができますが、この特徴をいかに守り育てるかが景観形成の課題と言えます。

課題の把握

- ①求菩提山をはじめとした歴史的景観の保全と継承
- ②伝統的農村景観の保全と継承
- ③景観まちづくりの推進と地域社会の活性化

①求菩提山をはじめとした歴史的景観の保全と継承

景観による歴史の追体験

信仰の山としての求菩提山の歴史は5～6世紀にさかのぼるとされていますが、12世紀初め頃（平安末期）に旧豊前国宇佐郡出身の僧、頼厳によって、ここに修験道がもたらされたと言われていています。それ以来、明治元年の神仏分離令まで、天台宗護国寺を中心に、求菩提山は九州を代表する一大修験道場となりました。以来求菩提山一帯は宗教的な性格を持つ文化的な歴史景観としての性格を有することとなりました。

地区を訪れる人が現地の景観を見て、中世における修行の場をイメージが出来るような個々の景観の保全や整備に加えて、情報提供をどのような方法で行うかが課題です。

景観資産のリストアップ

求菩提地区を含む求菩提山一帯は、宗教的な性格を持つ文化的な歴史景観としての性格があります。

従って、文化財などの歴史的景観の保全だけではなく、大山祇神社の神楽やお田植祭り等の継承のほか、伝承や伝聞を含めて、地域の記憶が宿る景観要素についても、ここの意味を地域の共通認識として育てていく方法が課題となります。

地域の歴史や記憶を伝える景観的な要素をリストアップし、まちづくりの景観資産として位置づける方法が課題です。

■ 求菩提山をはじめとした歴史的景観の保全と継承の課題

課 題	内 容
求菩提山の景観資産のリストアップ	・ 景観資産をリストアップする仕組みが必要
求菩提山の景観資産の継承	・ リストアップした景観資産の説明案内や情報提供、景観整備等が必要
今の景観を介して「豊州求菩提山絵図」の世界を体験できるようにする工夫	・ 近世の農業や信仰等の体験イベント、解説や図書等の充実

②伝統的農村景観の保全と継承

棚田を中心とした農村景観の継承

現在の棚田は、良好な景観を呈しているものの、一方では全国的な農業の衰退等により棚田上層部ではスギやヒノキの植林が進み、不耕作地の増加も景観的に問題となっています。

中世以来この地では、谷地の斜面に石垣を築き棚田を造ってきました。棚田の保持は平地の水田管理にはない高度な農業土木技術を必要としました。また、岩岳川の各所には堰を築き水路を用いた灌漑技術と、両岸山腹からの湧水を利用した水の確保など、狭隘な土地を有効に利用しながら農業を維持してきました。このような農村景観の基盤的な要素を、現在の農業を続けるなかでどのようにして継承していくかが課題です。

農作業に縁の深い石造物や農小屋、特にツチ小屋など地域の農村景観を特徴づける景観要素は中世から近世にかけて培われてきたものであり、各要素をリストアップするとともに、地域と行政が連携して保全や整備を行い、来訪者が農村景観を体感できるようにすることが課題です。

美しい農村集落のたたずまいの継承

求菩提地区における伝統的な農村集落のたたずまいは、建物の位置や伝統様式及びマヤを含めた屋敷構えが重要な要因となっており、その空間的秩序を保全することが集落の美しさを継承することにつながります。しかし、老朽家屋の建替えによる近代的な住宅の立地や、基盤整備による土地の形質の変容、また、道路整備等におけるブロックによる法面整備など異質な景観要素の出現などの問題もあります。

敷地の形質をはじめ建物の位置や様式などは住民の生活と深く関わる問題であるため、生活と地域全体の景観のあり方について意識を深めることが重要です。その上で景観形成の方針や支援などの具体的な方策を定めることが課題です。

また、伝統的な農村景観の特徴を阻害するおそれのある開発や整備については、そのような行為に先立つ景観検討の仕組みが必要です。景観検討のために景観形成の方針や基準などの仕組みを確立することが課題です。

■ 伝統的農村景観の保全と継承の課題

課 題	内 容
棚田を中心とした農村景観の維持	<ul style="list-style-type: none">・ 望ましい農村景観意識の共有化・ 景観形成とまちづくりの連携一体化等
伝統的農村景観を特徴づける景観資産の継承等	<ul style="list-style-type: none">・ 景観資産のリストアップと保護対象の明確化、及び保全誘導方法の確立・ リストアップした景観資産の説明案内や情報提供、修景整備等が必要・ 農地、屋敷地、農家等の建造物等の保全と支援施策
伝統的農村景観の阻害を防止する方策	<ul style="list-style-type: none">・ 新しい開発、建造物、工作物などに対する規制誘導、景観形成基準に確立

③景観まちづくりの推進と地域社会の活性化

歴史景観と生活景観とのバランス

求菩提地区の景観は歴史と生活が織りなすものであり、景観形成にあたっては歴史的な価値と農業や生活上の価値の調和をとることが重要です。伝統的生活様式と新しい生活様式の調和をとりながら、地域全体の景観的なまとまりをどのように育てていくのか、その方策が課題となります。特に棚田においては現代の農業の機械化や大規模農地の収益性と比較すると非常に厳しい状況にあり、石垣や水路の維持管理など技術的な継承も含めた農地保全が課題です。

また、体験農業や棚田オーナー制などの都市との交流をどのように促進し、また派生するマイナス面にはいかに対処するかなど、広い意味でのまちづくりの枠組みのなかで具体的な景観形成のあり方を継続的に検討していくことが課題です。

地域マネジメントの仕組み

求菩提地区の歴史景観を基盤にしながらか種々の建設や整備をするためには、景観形成にかかわる基本的な考え方を方針として定めた上で、その方針に沿って各種の建設や整備等の景観形成を誘導する仕組みが必要になります。その仕組みづくりにあたっては、地域や行政、専門家、事業者が参加するようにすることが重要です。

今後の多様な景観形成に際しても多様な人々の参加が不可欠です。そのためにも、景観を守り育てる意識をまちづくりとしてそれぞれが共有する仕組みが課題です。

■景観まちづくりの推進と地域社会の活性化

課 題	内 容
生業としての農業の継続と景観形成が両輪となるまちづくり	・農業後継者の育成と都市との交流による棚田の維持管理 ・棚田ブランド米の開発
全体としての景観的なまとまりを維持する仕組み	・地域の運営主体や、専門家参加、行政と連携等
都市との交流によるマイナス効果の予防措置	・違法駐車、ゴミ、看板の増加

(4) 景観づくりを実現していく上での課題

豊前市固有の景観を「守り」、損なわれた景観を「修景」し、魅力と活力ある景観を創造しながら「育て」、地域づくりや活性化に「活かし」、その魅力や活動を後世に「つなぐ」ことが必要です。

①行為の制限の段階的な実施

景観に影響を及ぼす行為についての制限は、求菩提地区を対象とする景観計画では、建築物の形態・意匠などについて厳しい基準を設定していますが、市域全体を対象とする場合には、段階的にコントロールを行っていくことが考えられます。

まずは、市域全体を対象に、景観に大きな影響を与える大規模な建築物の規制・誘導を行う、最低限守ってほしいことだけを定めた「緩やかな基準」を設定するなどにより、景観を破壊する重大な行為を食い止めることが必要です。その後、景観形成上重要な地区やモデルとなる地区を順次決め、そこについて場所ごとにきめ細かく誘導を行っていくなどが考えられます。

②目標・方針の共有

誘導を行っていくにあたっては、市民や事業者などに景観形成の必要性を理解してもらうとともに、豊前市が目指す景観像や景観の目標を共有することが必要です。

③市民の景観づくりの取組みの促進

景観づくりは、市民の協力無しには進められません。様々な場を利用して啓発や広報を行っていくことが必要です。また、地域での街並みルールづくりなど、景観づくりの取組みに対する支援が必要です。

⑤景観づくりの推進体制整備

市民と協働して景観づくりを進めていくにあたっては、先進的に景観づくりに取り組んでいる地域団体・NPOなどの実績やノウハウを活用する必要があります。このような団体などと行政とが連携する体制づくりや担い手の育成が必要です。

より質の高い景観づくりを行っていくため、周辺市町や関係者と連携した取組みをしていくことが必要です。行政内部においては、届出受付・審査などの体制づくり、専門家が入った評価システムの構築、関係部局や福岡県、京築地域内の市町との連携体制の整備などが必要になります。